

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

たとえば、電車の中で走り回る自分の子どもが他人から叱<sup>しか</sup>られたといった場合、親が叱<sup>しか</sup>られている子どもの気持ちに同調してしまうことがよくある。子どもが叱<sup>しか</sup>られることで親が傷ついてしまうのだ。親自身は叱<sup>しか</sup>られる子どもがかわいそうに思えて、ダメなものをダメと言われたことを受け入れるのがむずかしい。

1、親は叱<sup>しか</sup>ることで子どもに嫌<sup>きら</sup>われたり、物わかりの悪い親だと思われるのを避<sup>さ</sup>けたい、という気持ちもどこにある。親と子どもの距離はとても近い。一心同体的な存在になっているようにも見える。

生まれたての赤ん坊<sup>ぼう</sup>が一心同体的であるのは当然のことだろう。おむつの交換<sup>こうかん</sup>や授乳<sup>じゅにゅう</sup>など、ほぼすべての面倒<sup>めんどう</sup>を親が見ているからだ。その状態から徐々に成長<sup>じょうじょう</sup>し、親から身体的にも心理的にも分化<sup>ぶん化</sup>し、独自の人間としてひとり立ちしていく。

自分に全面的な依存<sup>いぞん</sup>状態にあるときの乳児<sup>にゅうし</sup>に対して、親はたくさんの希望<sup>きぼう</sup>や夢や理想的なイメージを託<sup>たく</sup>すことも多い。

2

、子どもが大きくなるにつれて、自分の思

いどおりにならない場面に何回もでくわし、子どもには子どもの好みがあることに気づかざるを得なくなる。バスや電車の中で大声で泣き叫<sup>さけ</sup>んだり、体に良いとされる食べ物よりも、ジャンクフードのほうが大好きだったりする。そして、自分の好みとはまったく違うデザイン<sup>ちが</sup>のシャツを気に入ったり、絶対にしてほしくないと思うような言葉づかいをしたりもするのだ。そんな体験を繰り返すうちに、子どもと自分とは別人格であるということを実感していく。

ところが、先に見たとおり親と子どもとの距離感がないまま親子関係が続くことも多く、その場合、子どもが良い子であるという評価<sup>けいひやう</sup>が、親自身の評価<sup>けいひやう</sup>に直結しやすい。

こうした傾向<sup>けいこう</sup>にあると、家庭<sup>けい</sup>の規範<sup>きはん</sup>、社会<sup>しゃかい</sup>の規範<sup>きはん</sup>というものはなじまない。子どもは自分ならば、規範に従って〇や×をつけるより、自分の考えや好みに同調しているからこそ〇であり、その子どもを愛するというような形になりやすいのだ。

子どもが幼稚園<sup>ようちえん</sup>の頃<sup>ころ</sup>、スニーカーを買いに行つてこんな経験をした。子どもは迷わずキャラクター<sup>きゃくたー</sup>つきの靴<sup>くつ</sup>を選び、親としてはどうしたものかと決めかねていた。その様子を見た店主がこう言った。

「最近のお母さんたちは、お子さんがキャラクターつきの靴を欲しがると怒るかたもいらっしやいますからね」

私としては、ゴチャゴチャとした多色使いのキャラクター1つきの靴は、あまり好みではないので避けたかった。私自身のセンスが悪いと思われることへの怖れもあったと思う。だが現実の子どもは、そのキャラクターが好きだから欲しいというだけなのだ。母親の関心は、子どもが何を欲しているかよりも、あるべき姿やどう見られるかに偏りがちになる。手作りのおやつ、凝ったお弁当なども、もしかするとまた別のあるべき姿、ありたい姿なのかもしれない。

ただ、それは本当に子どもの幸せや満足につながるのだろうか。こうありたい、という自分のイメージや欲求の達成が先行していいだろうか。自分の描いた夢のピースを組み立てることに熱心なあまり、子どものニーズに手をさしのべることが後回しになってしまっていないだろうか。

加えて、自分なりの価値基準や規範が見つからない一方で、親の「こうありたい、こうしたい」というイメージの実現はやさしくなっている現実もある。

### 3

、計画出産などはどうだろうか。たまたま道で出会った妊婦さんに「いつがご予定なんですか？」とたずねたことがある。すると返ってきたのは「本当は一月ですが、仕事が忙しくなるので年末前に産む予定です」という答えだった。行きつけの店のスタッフさんも大きなおなかで「一二月が予定なのですが、ずれると保育園の申請が間に合わないの、一月には産む予定です」とさりと語る。子どもを持つかどうか、いつ産むかといったことでさえ、人の手でなんとかなる領域が広がっている。望んで思いどおりにならないことのほうが少ないのではないか、と考えるほどだ。

多くの領域で可能性やできることが広がり、思いどおりになることが増える状況では、どれが正しく、どれは避けるべきことなのかを判断することはますます難しくなるだろう。子育ては、親にとって思いどおりになってもならなくても、本当にこれでいいのかという不安を抱えながら、ということになりやすい。しっかりした規範を持たないまま、子どもをまわりと同じかどうか、親自身のイメージに合うかどうかで判断するしかないなかでは、不安は増すばかりだ。

E

一方、親のイメージに合わせ、親の思いどおりにふるまうことを要求される子どもはどうなるのだろうか。親のそういった姿勢は、子どもが独自の存在であろうとすることを規制する方向に向かいやすい。子どもも、自分自身の好き嫌いを表現しなくなっていく。こうした、これが好きという思いに関心を払われることが少なければ、自分が何が好きで何が嫌いか、自分にとってどんな状態が幸せなのか、よくわからなくなっても不思議はない。

こうした親による「自分＝子ども」という同一視が強く表れるのが、「いじめ」への対応だ。子どもから学校でいじめられたと打ち明けられたときによく見られるのは次のような対応だ。

▲「いつ、誰に？ どんなことされたの？ どうして？」と強い口調で質問攻めにする。

——こうした質問は「いじめられるなんてダメじゃない（やられること自体が×）」というメッセージとして伝わる可能性がある。つまり、子どもとの情緒的な距離が近いほど、子どもがやられたことは親自身がやられた体験とイコールになる。そのため、まず「何てひどいの」という怒り（いか）でいっぱいになったり、その怒りのせいで、その気がなく

\*きつもん

ても詰問口調になってしまい、結果としてそれが子どもを責めているように受け取られてしまうこともある。怒りにまかせて、学校や教育委員会へクレームをつけるといった行動にもつながりやすい。

▲「あなたが何か嫌われるようなことをしたんじゃないの？」

「あなたがダメだから仲間はずれにされるんじゃないの？」という質問をする。

——こうした質問にこめられているのは「あなたに非があるからやられるのだ」というメッセージだ。親は子どもが「自分がいじめられた」という感情の波立ちを静めることに手一杯で、いじめられて傷ついている子どもの気持ちやなだめたり慰めたりしにくくなっている。理不尽な目にあつたときに、自分がいけないからだ、と感情を抑え込むやりかたは、より深く心をむしばむことになりやすい。

それでは、親はどう対応すればいいのだろう。親の側は怒りや悲しみを感じたとしても、その感情に運ばれるままにしたり抑え込もうとしたりするのではなく、子どもの気持ちに對してのイメージションを拡げてみる。

「それじゃイヤだったろうね。くやしかったね」といった表

現で「君の気持ちがわかるよ」というメッセージを送ることが可能だ。共感とは、子どもと同じように感じ、同じように反応することではない。子どもがいま感じていることを言葉にしたり、「いまこういう状態なんだね、わかるよ」と\*

フィードバックしたりすることなのだ。子どもはいじめられた思いを聞いてもらい、「その気持ち、わかるよ」と受け入れられることでほっと安心し、それで済むことも多い。

(裴岩奈々『〇のない大人 ×だらけの子ども』による)

## 【注】

\*ジャンクフード——総合的な栄養のバランスを欠いた食品。

\*規範——ものごとを判断する規則、ルール。

\*ニーズ——要望。

\*情緒的——怒り・悲しみ・喜びなどの感情。

\*詰問——相手を厳しく責めながら、返事を求めること。

\*フィードバック——得られた情報を振り返り、アドバイスするために元に返すこと。

問一——線部A「子どもが叱られることで親が傷ついてしまうのだ」とありますが、それはなぜか。解答欄にあてはまることばを、文中から書き抜いて答えなさい。

問二 

|   |
|---|
| 1 |
|---|

|   |
|---|
| 3 |
|---|

 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア けれども      イ たえば      ウ また

問三 ――線部B「お子さんがキャラクターつきの靴を欲しがると怒るかたもいらつしやいますからね」とありますが、なぜ母

親は子どもがキャラクターつきの靴を欲しがると怒るのか。その理由として正しいと思われるものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもが、家庭の規範に全く従ってくれないことを許せないから。

イ 子どもを怒る様子を店主に見せ、しっかりした母親を演出しているから。

ウ 子どもが、センスの悪い母親だと店主に思われることを楽しんでいるから。

エ 子どもが自分の考えや好みと同調してくれないことを受け入れられないから。

問四 ――線部C「自分のイメージや欲求の達成が先行していいだろうか」とありますが、「自分のイメージや欲求の達成が

先行してい」とはどういうことか。――線部Cの直前の段落から一文を抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(句

読点も一字とする)

問五 — 線部 D「子育ては、親にとって思いどおりになってもならなくても、本当にこれでいいのかという不安を抱えながら、ということになりやすい」とありますが、それはなぜか。筆者の考える理由としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 親が正しいと考えていることは世間的には非常識なことばかりだから。  
イ 親の子どもの頃と現代では差があり、時代遅れになるかもしれないから。  
ウ 正しいものとそうでないものを判断する明確な基準がわかりづらいから。  
エ 最終的に子育てや子どもの成長も、お金をかければ思いどおりにできるから。

問六 — 線部 E「親のイメージに合わせ、親の思いどおりにふるまうことを要求される子どもはどうなるのだろうか」とありますが、この問いに対する筆者の考えを、理由もふくめて答えなさい。

問七 — 線部 F「子どもの気持ちに対してのイメージネーションを拡げてみる」とありますが、親が想像を拡げると、子どもにとってどんな利点があるのか。説明しなさい。